第8号

がん連携パスだより

発行：H23/3/25

三河便り

東北で起きた地震と津波により多数の被災者が発生し、各自治体は支援や受け入れを始めています。この支援作業は皆さんがなんとかしたいという気持ちを持ったこと、また日頃の医療関係者とのつながりが大きいことは、医師会やAWA311の動きをみると分かります。被災された方々への支援を行いながら私たちは、これをきっかけとしてより強力で柔軟性に富むつながりを作っていくことができるのではないでしょうか。まずは被災された方々に対して。その後は自分たちの住む土地のために。私たちが関わっているのはがんという分野ではありますが、つながり自体は分野など関係なく残っていくものと思います。

がん地域連携室　室長
三河　貴裕

「安房医療介護福祉連携・東日本大震災支援の会」 暫定事務局　花の谷クリニック　伊藤真美

2011年3月11日（金）午前中の外来が終わってほっとくつろいだ気分が流れ、待合室でスタッフ数名と立ち話をしていた時、竜巻がクリニック玄関のガラス窓にぶつかり、敷地内を走り抜けて行った。皆が騒然とした。それから2時間程して、東北地方太平洋沖地震が起こった。これまでにない大きな揺れ、避難口を確保するため、院内のガラス戸を手分けして開けて廻った。大津波警報が発令された。テレビに濁流が、港を、町を、車を、人びとをのみ込んでいく映像が流れた時、私たちも入院患者さん7名を連れて、高台にある千倉町の総合運動公園に避難することを決定した。

日本全体を大きな渦にまきこむことになった大震災が、こうして私たちのところでも始まった。3月14日計画停電が東日本で始まった。

1週間が立った。医療者が様々な立場で支援活動を展開し始めた状況があちこちのメーリングリストで流れていた。亀田総合病院で透析患者の受け入れが始まり、小野沢先生が在宅医の立場から、被災者の受け入れについての発信を続けていた。3月19日、小野沢先生にメールした。鴨川はすすめているから、だれか館山、千倉でも働きかけてはどうだろうとの返信。3月20日、安房医療ねっとで、南房総での被災者の受け入れ支援を呼びかけた。同日、多くのメンバーがそれぞれの立場で何かできることを模索していたことを知った。千倉の旅館組合長とも会い10の旅館で受け入れ可能とリストをもらった。震災から1週間以上が経ち、避難所での生活ではなく、中長期的視野に立って、避難先での暮らしを整えていくことが必要な時期になっている。特に要介護者にとっては、避難生活で制限されている医療と介護のサポートを早急にとりもどすことが必要だ。翌日21日、亀田総合病院の小松先生を通じ、原子力発電所から30km圏内にある南相馬市長室から、在宅療養中の要介護者とその家族を避難させたい、受け入れてもらえるかと連絡があった。有志が集まって、緊急集会を開いた。その夜遅く、南相馬市長から丁寧な電話をいただいた。結局、最終的に要介護者18人とそのご家族約50人は、栃木県の日光市に移ることが決定した。大変お世話になった、落ち着いたら南房総の皆さんにお礼に行きたいと。南相馬市からの受け入れはなくなったものの、原子力発電の事故で、日々深刻さを増すこの大震災に対して、我がこととしてできることに取り組みたい。「志し」をどうかたちにできるのか、有志だけでできることではない。関連諸機関との連携をどうとうとるのか。安房医療ねっとは、医師らが中心となって呼びかけ、2008年4月から2か月に一度の定例会を続けてきた。医療関係者が顔を合わせ、協働できる地域のネットワークづくりを目指してきた。その安房医療ねっとでのつながりを核に、もっと広く介護、福祉の関係者とも連携していくことが必要だ。ことは緊急を要している。24日夜、安房ねっとの有志でおそくまで原案をねった。

昨日30日、原子力発電所から5kmのところにある社会福祉法人　福島県福祉事業協会がもつ知的障害者の入所と通所施設の児童、生徒、成人ら、総勢200名からが避難先を探しているとの情報が、AWA311-MCWの事務局にはいった。社会法人太陽会の亀田信介先生が動き、AWA311-MCWも連携して調整が始まっている。　既存の組織だからできることがあり、既存の組織だからかえってできないことがある。有志の一人一人ができることを持ち寄って支え合う、緊急時にはそうした柔軟なネットワークが求められている。日本の有り様を一変させた大震災、これからの日本の10年を見据えた取り組みを、走りながら、皆さんとともに模索したい。

平成22年度　訪問医療機関

今年度、安房・夷隅・長生・君津・市原で計73か所の医療機関を訪問させていただきました。
皆さまからのご意見やご要望をもとに、更なる連携の強化を促進していきたいと考えておりますので、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。
※訪問医療機関の分布図を別紙にて同封させていただきます。

がん地域連携室スタッフより ご挨拶

カスタマーリレーション部
白鳥　真里

がん拠点病院推進センター
大久保　優

がん地域連携室の業務を行うようになり、あらためて「地域連携」について考えるようになりました。地域の医療機関の皆さまとの「顔の見える関係」がいかに重要な事なのか感じております。今後は、地域連携に対する我々と皆さまのパワーを更に活用できるようなサポートが出来ればと考えており、連携に関しましても行政・介護施設を含み地域全体での連携を行っていくことが高齢者が多く医療・介護ニーズが膨張する当該地域で必要なことだと考えております。まずはひとつひとつ出来ることからはじめていきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

Vol.3【安房地域における医療連携】

安房医師会　　宮川　準会長

旧安房医師会病院は地元の開業医が「病診連携」を目的に今から50年前に設立されました。高度な検査機器をもたず、入院施設もない医師会員に利便性を発揮する医療機関として期待されていました。残念なことに医療を取り巻く環境の様々な悪化により経営破綻をきたし、3年前に亀田グループの社会福祉法人「太陽会」に経営移譲され、安房地域医療センターとして再出発いたしました。経営主体が変わったことで亀田総合病院と綿密にリンクし更に「病診連携」は一層有効に機能してきています。
医師会員も安房地域医療センターを旧安房医師会病院と同様に位置付けて、以前と同様に活用しているところです。安房地域全体の医療連携はより円滑に機能することを期待しています。

亀田総合病院がん拠点病院推進センター
発行責任者：亀田　信介
編集責任者：唐鎌　房子
TEL：04-7099-1230〔内戦3248〕